すみだ地域学情報 We!

第30号
2014年
（平成26年）
10月発行

発行：墨田区教育委員会（生涯学習課）
〒130-8640 墨田区吾妻橋一丁目23番20号
☎ 03-5608-6309 FAX 03-5608-6411 ✉ syougaigakus@city.sumida.lg.jp

ふれあい 活力 ゆとり
すみだ

すみだ やさしいまち宣言・人と地域と環境のために

江戸の行楽地 向島

～向島三囲稲荷と秋葉権現社付近の賑わい～

将軍吉宗が隅田堤に桜を植えたのは享保2年（1717）ですが、何時から向島が賑わったのでしょうか。『嬉遊笑覧』（喜多村筠庭著）には「ここの花を賞する事は天明ごろなるべし」と言い切っています。堤の上には葭簀張の茶屋がありましたが桜の番人も兼ねたもので、桜の花の時期だけのものでした。

梅若塚を別にすれば、三囲稲荷社は向島でも早く知られた名所です。元禄6年（1693）6月28日、宝井其角が三囲稲荷の前を通りかかると、村人が雨乞いをしている。其角は村人に頼まれるまま「遊ふだ地や田を見めぐりの神ならば」と句を神前に奉納すると雨が降ったので、其角と三囲稲荷の名はたちまち江戸中の評判となりました。以来、俳諧や川柳・狂歌などの碑が三囲神社に建てられ、今も残されています。宝暦2年（1752）の三囲稲荷の開帳では、吉原玉屋の花魁花紫が十二提灯を出しました。吉原遊郭では宣伝が禁止されていましたから花魁の名前を売り出すために三囲の賑わいを利用したのです（『向島』奥野恒次郎著）。

秋葉神社周辺の賑わいも早い方でした。秋葉神社は江戸では秋葉権現社と言われ多くの大名や大奥女中の信仰を集め燈籠の寄進がありました。寛保元年（1741）の石燈籠は柳沢吉保の嫡子で綱吉の実子（甲斐守吉里）に嫁した頼子の寄進した物です。江戸城奥向きの信仰を得たのは、世継の祈願にも結びついたとも、参詣を口実の日帰りの遊覧のためともいわれます（隅田川とその両岸）。また、秋葉権現は、紅葉の名所としても江戸中に知られ、火伏の神として11月の大祭日には鎮火祭があり、火防の御幣を求める人で賑わいました。

秋葉権現社の周辺は、料理屋が多くあったことで知られますが、延享（1744―1748）の頃は三囲稲荷土手下の中田屋一軒だったようです（古今名家戯文集）。安永6年（1777）の黄表紙『親敵打腹鼓』に出てくる中田屋（葛西太郎）の挿絵には鯉鮒料理の外に、うなぎの蒲焼、どじょうの吸い物などの品書きが見えます。この辺りの鯉は江戸一番と評判で、寺社参りと言いつつも、寄らずには帰れないのが料理屋でした。安永10年（1781）『種おろし』に流行ものとして生簀鯉があり、庵崎葛西太郎、須崎大黒屋孫四郎の名があります。

『江戸名所図会』巻七の庵碕（雪旦画）には武蔵屋の付近の様子が描かれています。庵碕とは隅田川東岸の向島を指しますが、画は現在の向島四丁目付近の風景です。「酒客多くここに宴飲す」として葛西太郎と武蔵屋の記述があります。武蔵屋は寛延（1748―1750）の頃から麦めしばかりを出して「麦斗庵」と称していましたが（嬉遊笑覧）、天明の頃からは貸席もやり鯉料理も出す高級料理屋武蔵屋となったようです。

天明6年（1786）4月12日、本所相生町生まれの烏亭焉馬がワッと面白い噺をやろうと思いつき、第一回の噺の会を武蔵屋で行ないます。百人以上が集まりました（石川雅望研究）。寛政4年の噺初めでは「昔話の会が権三り升　正月」とだけの案内でした（化政期落語本集）。「昔話」の昔は廿と一と日の合わさった字ですから二十一日と日付がわかりました。武蔵屋の亭主の権三はゴンザリマスと言うのが口癖でしたから、「権三り升」で場所は武蔵屋とわかったのです。武蔵屋が世間に知られていたからこその江戸っ子らしい洒落の効いた案内です。

集まった同好の面々は、四方赤良（大田南畝）、朱楽菅江（山崎景貫）、酒上不埒（恋川春町）など、江戸の名だたる狂歌の連中で、他にも宿屋の主人、家主というように武家に混じって町人も仲間でした。山東京伝や北斎も、こうした連中と盛んに交流していました。この噺の会は年々続けられ、後には江戸落語へと発展していきます。また、鶴屋南北の娘の一人は武蔵屋に嫁ぎ、画工にして連歌師の文人勝田亀岳を生んでいます（増補鶴屋南北序説）。

このように、まず、秋葉神社付近の料理屋が文人サロン化し、江戸庶民文化の拠点となります。次に登場するのが、文化元年に佐原鞠塢が開いた百花園で、当代一流の文人が集い、風雅に富んだ江戸の理想的な遊覧地としての向島文化が形成されていきます。

（墨田区文化財調査員　松島　茂）

掲載絵図：江戸名所図会　巻七「庵碕」（部分）（すみだ郷土文化資料館蔵）

平成26年度（前期）すみだ地域学セミナー講演（6月14日）より

幸田露伴が歩いた向島

東海大学准教授　出口　智之

幸田露伴住宅（蝸牛庵）　（博物館明治村）

江戸のおわりから明治・大正時代にかけて、向島には郊外の風趣を愛した多くの文人墨客が集まってきました。近代を代表する知の巨人、幸田露伴もその一人です。慶応3年（1867）、江戸に生れた露伴は、和漢の文学や歴史、思想、宗教などから釣や将棋といった趣味にいたるまでの、無類の博識を生かした多くの作品を残し、第二次大戦後の昭和22年まで満80歳の長寿を保ちました。作家としての活動も60年近くにおよびますが、その約半分をすごしたのがこの向島の地だったのです。

露伴がはじめて向島に住んだのは、明治26年のことです。この時の家は、幕末の外国奉行だった岩瀬忠震が建てた岐雲園という邸宅で、現在の白鬚橋の近くにありました。明治の中ごろから、父母や長兄がここに住んでいましたが、露伴は彼らが転居したそのあとに入ったのです。しかし、この時はわずか1年ほどで引越してしまいました。

明治30年、露伴は本格的に向島に居を定めます。寺島村大字寺島字新田一七一六番地にあった、雨宮酒店の隠居所を借りて住んだのです。若いころから転居続きだった露伴は、自分を殻を背負って歩くかたつむりにたとえ、住む家を蝸牛庵と呼んでいましたが、岐雲園を除くとこれが第一の向島蝸牛庵ということになります。現在、愛知県の明治村に移築されているこの家では、愛妻、幾美との間に歌、文、成豊（一郎）という三人の子が生れ、幸せな歳月のなかで「二日物語」「一国の首都」「天うつ浪」「土偶木偶」といった多くの名作が書かれました。

すぐ近くの一七三六番地、現在は露伴児童遊園になっている第二の向島蝸牛庵に移ったのは、明治41年のことです。良き妻だった幾美が、いつしか資金を貯めていたのだそうで、露伴自身が家を設計したと伝わっています。この家でも「努力論」「運命」「望樹記」など、露伴文学を代表する名作が書かれましたが、一方で妻と長女を相次いで失う、悲しい出来事もありました。後に作家になった次女の文が、「こんなこと」「みそっかす」などに印象深く描いているのもこの家です。

露伴の向島時代はまた、趣味の釣を存分に楽しんだ時期でもありました。当時の日記を見ると、時には数日おきに釣に出かけていた記録が残っています。近くて行きやすい中川のほか、しばしば利根川までも足をのばしていました。そうした体験に取材した作品も多く、なかでも後年の「蘆声」は、晩年を代表する傑作の一つです。

このように、露伴にとって向島は、あたたかな家庭を育み、趣味に興じ、おだやかな郊外の生活を楽しんだ土地であったと同時に、妻や子を失った悲しい思い出の残る地でもありました。そうした人生の起伏や陰翳を胸に、露伴はいくつもの名作を生み出しています。大正12年の関東大震災に際しても、蝸牛庵は無事で家族にも被害はありませんでしたが、井戸に油が浮いて使えなくなったりして、翌年やむなく小石川へと転居せざるをえませんでした。しかし、露伴の歩いた向島は、その文章のなかに今も生き生きと息づいているのです。

露伴児童遊園（東向島一丁目７番）